

# News letter 号外

スウェーデンにおける野外保育のすべて  
「森のムッレ教室」を取り入れた保育実践  
著書:エーバ・エングゴード 訳者:高見幸子・光橋翠  
出版社:新評論

出版から4ヵ月、  
さまざまな分野の皆さまからご感想をお寄せいただきました。  
※掲載は順不同です。ご了承ください。

(一社)日本野外生活推進協会

2020.2.25 発行

## ごあいさつ

日本野外生活推進協会 代表理事 高見 豊

この度は、ストックホルム大学の研究者であるエーバ・エングゴードさんの著書「スウェーデンにおける野外保育のすべて」が、高見幸子さん・光橋翠さんの手によって翻訳され2019年10月に新評論より出版されました。

森のムッレ全国ネットワーク団体の皆様にはすでに披露させていただきましたが、この本を幅広い分野の皆様にも読んでいただき、ご評価をいただきたいとご無理なお願いをいたしました。

読んでいただきました行政関係・研究者で、野外保育に関心の深い皆様にそれぞれの立場から書評をいただきました。この度、書評をお寄せいただきました皆様に心より深く感謝申し上げます。



今現在、「森のムッレ教室」を実践していただいているリーダーの皆様には、現実と重ね合わせ読んでいただいたのではと思います。

今回の出版が野外保育を始めるきっかけとなること、また「森のムッレの野外保育」に関心を持っていただきムッレのリーダーが増えることを願っています。

## 札幌医科大学神経精神医学講座 准教授 鵜飼 渉 氏

世界をとらえ、自分を見つめる、豊かなところを持つ子どもを育てるステキな本が出た。近年、自然環境が、子どもの精神発達に影響するとの報告が相次いでいる。ストレス耐性、落ち着き、寛容さの増強にとどまらず、こころの病の発症予防効果にいたる様々な報告が世界中で続いている。子どもの、人間のこころの発達にとって、自然と関わる活動がなぜ重要なのか？この難問に向かって（難問ではあるが、この問いと向き合うことは非常に喜びである）、Q.人間にとって自然とは何なのか？Q.音、におい、感触、雄大さ...自然のどんな要素が鍵なのか？研究者はずっと考え、追い続け、その結果、複雑性（環境エンリッチメント）の意義や、自然と人のこころを繋ぐ分子（BDNF：神経栄養因子など）の重要性などが見出されるに至っている。アニミズムともつながる、スウェーデンでの伝統的な自然・環境教育活動である、森のムッレの全貌をやさしく解説する本書が、自然とともに生き、自然を敬愛する日本人の観念と融合して発展していく子どもの野外活動の実践に大きく貢献する姿に期待したいと思います。

## 大阪大谷大学教育学部教育学科 教授 井上美智子 氏

著者はストックホルム大学の研究者で、スウェーデンの野外生活推進協会から認定を受けている野外保育園での保育活動に参与観察し、野外で行う保育が子どもの発達にどのような意義があるのかを子どもの姿や保護者の声などから分析しています。野外保育が子どもの育ちにいかに効果があるのかを様々な観点から説明されており、日本で森のムッレ教室や森のようちえん活動をしている人には納得がいく内容となっています。野外教育に関心のある人にお勧めの本です。

スウェーデンらしさを感じるどころもいくつかありました。例えば、野外教育の効果に焦点が当てられているのですが、保護者の声や著者の分析の観点に環境教育的なものが表れます。幼児期の野外での学びがいずれ環境保全をしたいという気持ちにつながるという信念があるように思われました。この観点は日本では取り上げられることが少ないです。そして、もう一つは、ジェンダーの観点からの読み取りがあることでした。野外の方が子どもはよりジェンダーフリーな遊びに没頭できるという観察です。自然の中での遊びは子どものいろいろな差異を目立たなくすると感じている人は多いと思いますが、ジェンダーの観点からの分析も日本ではあまりなされていないようです。一方で、森でみられる象徴遊びのなかで、スーパーヒーロー遊びと動物遊びがあげられていて、これも日本との違いを感じました。スーパーヒーロー遊びは男の子の遊びとしてあげられ、ジェンダーステレオタイプな遊びとみなされていましたが、セーラームーンやプリキュアがある日本との違いと言えるでしょう。そして、動物遊びは出てくる名前がワニやヒョウなどの実際には本国にいない動物たちでしたが、スウェーデンの子どもの遊びによくあるそうです。

文化の違いを感じながらも、野外保育には意義があると主張したいときの一つの後ろ盾になる本だといえるでしょう。

## 広島文教大学教授・日本自然保育学会理事 杉山浩之 氏

幼児の環境教育を考える貴重な 1 冊が日本で新たに刊行されました。スウェーデンは、子どもの権利条約に繋がる「児童の世紀」を著したエレン・ケイ、「森の小人たち」などの絵本作家 E.ベスコフ、「やかまし村の子どもたち」などの児童文学作家 A.リンドグレンを生んだ国です。そこには、子どもを独自の存在としてみる思想に加え、民主主義と自然享受権の考え方も生きています。「森のムッレ教室」もこの繋がりに位置づくということです。

本書は改めて野外保育の意義や効果を語り、「雨の日も晴れの日も基礎教本」および「野外就学前学校の教授本」に基づきながら、子どもと保育者との関わり、遊びにおける表現活動、プロジェクト、ドキュメンテーションとリフレクションなど、「森のムッレ教室」の活動について、翻訳とは思えないように分かりやすく書かれています。「遊びのリソースとしての自然素材と環境」(6 章)「森での象徴遊び」(7 章)など実践の解釈の切り口も興味深いものです。そして学問的な実証研究や森の中での活動例を繋げながら、実践者が活動の意義を納得できるように、さらに振返りに活用できるように構成されています。北欧を中心にした保育学の研究成果を紹介する遊びの事例と繋げていることも特徴的です。スウェーデンの保育者養成講座のテキストでもある本書は、気候変動の深刻化、生物多様性の危機、プラスチック汚染など地球の将来の岐路に立たされている今こそ必要な哲学と実践を方向付ける貴重な情報を提供している本です。ムッレ教室リーダーを初め、自然保育に関心のある方には、是非ご一読をお勧めします。



## 長野県北安曇郡池田町 教育長 竹内延彦 氏

人類は、その長い歴史のほとんどを自然の中で暮らし、自然との共存に試行錯誤する連続であった。まさに「雨の日も晴れの日も」生きるための営みは途切れることなく、自然環境という大きな舞台の上で、親子代々それぞれの幸せを求め続けてきたはずである。

産業革命以降の経済発展の中で、自然は共存するものから「利用し消費する対象」へと変わってしまった。そして今、年々深刻さを増す地球規模での様々な自然災害に直面する中で、ようやく環境問題に正面から向き合うことの重要性が認識され、幼児期から環境教育に取り組むことの必要性も問われている。

長野県が全国に先駆けて創設した「自然保育認定制度」は、一人でも多くの子ども達に自然の中での豊かな体験の機会と環境を保障したいという思いでスタートしたが、子ども達の健康な心と体を育むだけでなく、地域社会と日本の未来を支える知恵と力を蓄えてほしいという願いも込められている。

近年、日本でも保育園、幼稚園問わず「自然保育」への関心が高まっているが、本書は、「乳幼児が自然の中に出かけることは危険なのでやらない」とか、「自然の循環や環境問題については話しても理解できないだろう」という多くの大人たちの思い込みをわかりやすく崩してくれる。

「野外保育のすべて」というタイトルが示す通り、この一冊で、乳幼児期から自然と共に暮らすことの大切さを十分に追体験することができる。

本書は、人間だけが地球上で特別な存在ではなく、全ての動植物と同じく自然物の一つとして進化してきたことを再認識させ、自然と共存しながら成長できることが一人ひとりの幸せな人生につながる確かな道であり、子ども達にも必ずや豊かな未来をもたらしてくれる、という人類として失ってはいけない価値観を呼び覚ましてくれるに違いない。



**保育者の役割は、ともに発見し、経験するというものです。保育者と子どもは、自然の中で過ごす時は一緒に発見をします。**

**子どもが何か興味を引くものを見つけた時には、保育者がそれを見に行き、子どもと一緒に感動したりします。また、子どもが質問を投げかけてきたり、遊んでいるときには、その活動に参加します。**

～本書 94 ページ「保育者の任務」より～

長野県飯田市美術博物館 副館長 池戸通徳 氏

読み終えて小さくため息をした。スウェーデンが羨ましかった。

私は森林の活用において日本の現状に危機感を持つ。両国共に国土の約 8 割が森林なのに、政策や国民意識の差が大きく残念でならない。

しかし、高見幸子氏、光橋翠氏の翻訳によりエーバ・エングゴード氏の素晴らしい著書を日本語で知り学べたことは大変有意義であり、感謝・期待・希望が膨らんだ。森で遊ぶ子どもの姿が見えるくらい詳細な事例と背景にある思考は、日本の幼児環境教育に光を注ぐだろう。

私は 2003 年 2 月「持続可能な森林の活用を目指すスウェーデンツアー」に参加して自然享受権や野外生活推進協会を知り、これがターニングポイントとなり、森のムッレ・クニユータナ教室リーダー養成講座やナチュラルステップ講座を受講して考え方や意義を学んだ。ツアー以降は、仕事(病院、健康推進、林業政策、環境、美術博物館)においてスウェーデンの政策や環境教育、森林保全を意識してきた。

環境・観光・健康における森林の活用が進む中、日本はまだ幼児期に野外で生活する時間が少ない。子供が自然に触れてワクワクする遊びや学びを体験するためには、意のある大人が誘導し自由な遊び時間を与えることが必要である。拝読して改めて「特別な場＝森」が重要と気づかされた。僕らは自然豊かな所で五感を使った案内ができることが大切で、森林内で動植物のありのままを「観察して調べて予測して、試行してまた観察する」ことが求められている。研究成果では、室内で教育を受けるのと野外とでは、野外の方が集中力・協調性・積極性において優位とあり、同感である。野外で自然感覚を得た子供は環境意識のより高い大人になる事例は多い。環境活動家グレタ・トゥーンベリ氏がスウェーデン人ということは幼児期の体験教育が基盤だと想像する。

長野県は「森のようちえん」を推進中で、飯田市の公立保育園は全て県の認定園となり、園児は週の一定時間以上を屋外で過ごしている。ただ、「雨の日も風の日も」野外…ではない点は残念である。屋外で「感覚運動遊び」や「象徴遊び」が盛んに行われ、感性が豊かに育つことを望む。

この本を多くの方に読んで欲しいと願い、私は市立中央図書館が地方新聞に連載している本の紹介「よむとす」への投稿や、森のムッレ教室を実践する認定こども園(ムッレ役は私)へ情報提供をおこない、普及啓発した。

高見幸子氏には、野外生活推進やナチュラルステップの基本ほかスウェーデンの神髄に加えて、この幼児環境教育のバイブルでご教授頂いたことに、改めて心より感謝を申し上げ、今後益々のご発展とご活躍を祈念するところである。

**自然の中では、出来事を一緒に体験することができます。動物が現れるというような予期せぬ出来事も起きます。このようなことが、大人(保育者と保護者)と子どもの間に連帯感を作り出すことになるのです。**

～本書 94 ページ「保育者の任務」より～



NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティー代表

北海道教育大学札幌校「野外教育論」、藤女子大学「レクリエーション入門」非常勤講師

山本 幹彦 氏

本書が自宅に届き、出張の移動中に一気に読みました。スウェーデンの保育に関わる方々の野外教育の定義、その効果、教育手法だけではなく、具体的な子どもたちへの関わりと、表題のとおり「スウェーデンにおける野外保育のすべて」が今まで以上に身近に感じることができました。私ごとで恐縮ですが、昨年の秋以降のオフシーズンに入ってからというもの、一昨年に翻訳出版した「遊びながら野外で学ぼう”野外で算数”実践ワークブック」を紹介するために全国各地に出かけています。その時、単に活動を紹介するだけではなく、教室から野外に出て（アウトドア）の学びについての効果の話では、「野外で算数」の著者が日本で行ったセミナーでの内容と重なる部分も多くて非常に参考になります。また、第4章の「活動の場としての森」の中でエドワード・レルフの「場所の現象学」やイーファー・トゥアンを引き合いに出しての子どもたち一人ひとりの森としての場所のアイデンティティの形成のためのプログラムというか、プロセスの説明が非常に面白かった。そして、最後の章ではリチャード・ループの Last Child in the woods を引用しながら、「どのようにすれば、子どもは自然と関係を持つようになるのか？」と問いかけ、「ある場所が子どもに関連を持つためには、子どもがその場所を他の子どもか大人と一緒に体験する必要があります。その場所を使い、一緒に過ごし、何かをして、想像するのです。それによって意味が伝わり、分かち合うことができるのです。」という文章では、レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」を思い出しながら読みました。そういえば、「野外で算数」のセミナーの中で、この「センス・オブ・ワンダー」の話から始めることが多く、全体を通して著者と親しみを感じたり、共感しながら読み終えました。スウェーデンの野外保育の紹介をしながら、野外教育について理解できる本だといえるのではないかと思います。

NPO 法人 響育の山里くじら雲 代表 依田敬子 氏

訳者のコラムが入っているのが良いと思いました。スウェーデンの状況がよくわかります。

第1章では、特に「子ども文化における自然」に興味深く読みました。

第2章では、共感できる箇所がたくさんありました。日本の人々に読んでほしいと思いました。自然が子どもたちの心と体にとって、とても有効な環境であることが保育者の声として伝えられています。また、コルチゾールの調査について「ポジティブなストレス」と「ネガティブなストレス」のことも、納得できました。

第3章は、まるで映像を見ているように描写されていました。「保育者の任務」について書かれていたことは、共感でき、こちらもやはり、日本の保育者に伝えたいことだと思いました。

第9章では、「普通の就学前学校でもその教育の一部を導入することができます」とあります。これは、長野県の「信州型自然保育認定制度」に共通する考え方だと思いました。すべての子どもたちにとって必要な自然体験を一般の園でも取り入れられるよう制度の中に特化型の他に普及型が作られました。

1箇所、どういう意味かと疑問に思ったのは、275ページの8行目「大人の準備した遊びをするのです」とありますが、これは、伝承あそびや歌、手遊び、絵本の読み聞かせなど、大人がリードする活動なのかなと想像しました。

全体を通して、構成がよくできていて、「スウェーデンにおける野外保育のすべて」というタイトルの通り、それを網羅された内容だと思いました。いつか、私もこのような本を作れたらいいなあと思いました。

日本のいろいろな人にこの本を紹介していきたいと思います。

## NPO 法人青空保育たけの子 代表 邊見妙子 氏

全体的に読みやすく、これから野外保育をやってみたいという人にも、すでに野外保育に取り組んでいるという人にも、どちらにとっても様々な示唆に富み参考になる項目が次々と出てくるので、一気に読めてしまう本だと思います。

特に保育者や子ども達のやり取りがそのまま書かれていることは、思わず笑みがこぼれてしまうほどほほえましく、その内容にハッとさせられることも多かったです。「レインボーゲン野外就学前学校」の保育者たちはとても経験が豊富で、どこまで子ども達自身で発見したり友達同士でやり取りするのかを見守り、かつどのタイミングで介入し、子ども達がより自然への探求心や人間関係を深められるのかがわかっているようです。

自然の中ではジェンダーフリーの遊びが行われることが多く、それが後に社会に出て行った時に男女平等の価値観を持ちやすくすることについても書かれています。

しかしその一方で、野外の中でも社会を映し込んだ遊びも展開されており、子どもたちは男女の役割を普段の社会生活の中から受け止めていくのだということを改めて知りました。

「雨の日も晴れの日も」の認証を取り入れている野外就学前学校には必ず園舎があり、野外と室内、それぞれに適した活動をすることが強調されていて、子どもが自由に遊びを選びその可能性を見せることとなっていることを知り感銘を受けました。

わたしたちの園にも何度が園を変え、ようやく楽しく通えるようになったという幼稚園難民のような子もいます。その子が「たけの子は自分が遊びたい時に外にいけるのがいいんだよ。」と言っていました。それは、管理されている場所から解放され自由を得た喜びに満ちていました。野外教育で得られるものは様々あると思いますが、わたしは二つの想像・創造力と考えています。この本はそれを存分に感じさせ、発展させられる本です。

### 訳者のコメント（高見幸子氏・光橋翠氏）

本著は、野外保育をあらゆる観点から分析をして、野外保育の必要性を議論し、また、子どもたちを自然に誘う具体的な提案をしてくれている点が素晴らしい。しかしながら、「森のムッレ教室」は、自然に出かけるだけでなく自然について学び「自然感覚」を育むことを目的にしている。「自然感覚」とは何か、またどうすれば身につけることができるのかの研究がこれからのSDGsの取り組みにおいて重要になると思う。更なる研究に期待をしたい。



### ＊□＊投稿文募集のお知らせ＊□＊

ご自身のムッレ活動や野外活動に関する情報ご意見・ご感想などを募集しています！

①コラム名、②著者名、③所属先名、④電話番号、⑤E-mail をご記入の上、投稿文と活動写真(1～2枚)を添えて、E-mailにてお送り下さい。

ご投稿お待ちしております。

担当：松枝

E-mail: mulle2639@gmail.com